

第1章 子育て支援に取り組む地域活動推進シンポジウム in 群馬

1. シンポジウムの概要

テ ー マ：子育て支援の輪を広める

～子育て支援の輪にシニアはどのようにかかわっていけばいいのか？～

日 時：平成 18 年 2 月 10 日（金）13 時～16 時 10 分

場 所：群馬県女性会館

参加人数：80 人

開催目的： このシンポジウムは、地域における住民参加による子育て支援活動を活発にするために、乳幼児を持つ母親の子育て事情について理解を深め、子育て支援のニーズを明らかにするとともに、「子育て支援の輪を広める」をテーマに子育て支援の輪にシニアはどのように関わっていけばいいのかを話し合う。

タイムスケジュール：

13:00 開会

13:00～13:10 開催行事 会長挨拶

13:10～14:00 基調講演「現在の母親の子育ての状況とニーズ」

講師：森 静子（関東短期大学子ども学科助教授）

14:00～14:55 事例発表

14:00～14:20 （1）「NPO法人市民メディアペーパーみんとかんぱにー」

報告者：荒川 香苗 代表理事

14:20～14:40 （2）「こねこクラブ&ひよこクラブ」

報告者：井上 貴美枝 代表

14:40～14:55 （3）子育て関連施策

報告者：加藤 仁子 群馬県生涯学習センター指導主事

14:55～15:10 休憩

15:10～16:10 パネルディスカッション

パネラー

荒川 香苗（NPO法人市民メディアペーパーみんとかんぱにー代表理事）

井上貴美枝（こねこクラブ&ひよこクラブ 代表）

加藤 仁子（群馬県生涯学習センター指導主事）

コーディネーター

森 静子（関東短期大学子ども学科助教授）

2. 基調講演の主な内容

保育学・幼児教育等を専門とする森先生に「現在の母親の子育ての状況とニーズ」というテーマで講演していただいた。主な内容は、以下の3点である。

第1に、現在の母親がおかれている状況について。現在は共働きが多く、特に母親は仕事と育児の両立で様々な困難に直面するという。



この点について、保育士の仕事を持ちながら子育てをしてきた講演者自身の経験から語られた。そのなかで、女性が仕事をして社会の中で役立つことは大切であること。母親のなかには社会においていかれるという悩みを持っている人も多く、「だれだれちゃんのお母さん」ではなく一人の人間として自分の名前を出して生きていきたいと思っている人が多いこと。その一方で、「食事力」や「子育て力」をはじめとする「家庭の教育力」が失われているので、家庭を支えるために子育て支援が大切であることが強調された。

第2に、地域の子育て支援におけるシニアの重要性について。現在シニアが必要とされる場面はたくさんあるという。その一つは、保育園の場面である。現在、保育園では、園に通っていない子どもたちに様々な支援を行っている。その支援に、シニアの出番がある。というのも、若い保育士は、元気はあるが、子どもの抱き方が下手で、学校で理屈は学んでもなぜそれが子どもに必要なかという所が欠けている。シニアの方は、体力はないけれども、経験や知恵があって子どもを抱くことはとても上手である。シニアと若い人の力を合わせれば素晴らしい支援ができることになる。もう一つは、虐待対策の場面である。最近では、子ども虐待防止ネットワークがあり、子育てに関係する小学校、中学校、教育委員会、民生委員、警察等が集まって、家庭での心配事について相談し、支援策を考えていくという試みがなされている。子育てを支える関係者が一堂に会して問題を解決していくことになるが、縦割り行政等それぞれの領域でバリアがある。そのバリアを壊すために、シニアの知恵が必要とされているのである。他にも事例を挙げながら、シニアが活躍する場について語られた。

第3に、シニアが子育て支援をする際の心構えについて。シニアが子育てに関わる時に一番重要なのは、「ザル」（固定観念）を捨て去ることであるという。人は、生きていくなかで「ザル」を作ってきてしまう。それは、子どもや母親はこうあるべきという「ザル」である。シニアの方は、どうしても「ザル」を持ってしまいうし、しかも年を重ねるにつれ「ザル」は大きくなり、「ザル」の目は細くなっていく。しかし、子育て支援には「ザル」は要らない。「べき」がつくと今の人嫌がるし、制約があると若い母親は心を開かない。従って、子育てのお手伝いをするときには、「ザル」を必ず押入にしまってくださいと訴えた。

講演者には、「人間は人間にしか育てられない。テレビや狼では育てられない」という考えがある。だからこそ、子育て中の若い親のそばにシニアがそっと寄り添って欲しいと願っている。参加者にむかって訴えかけた「皆さんの力を貸して欲しい」という切なる思いが心に深く刻まれた。

3. 事例報告の主な内容

「NPO法人 市民メディアべばーみんとかんぱにー」

まず、NPO法人市民メディアべばーみんとかんぱにーに代表理事の荒川香苗さんから、年1回発行されている子育て情報誌作りを中心に活動報告がなされた。活動を通して見てきた今どきのお母さんは、一般に思われているような「自分勝手な」とか「強い」親ではなく、実は非常にナイーブであるという。外に出たり人前に出たりするのをためらう方であるし、自分の殻に閉じこもりがちである。だから、「一歩出ればいろいろなところがある。まず出てみよう!」という視点を誌面作りにかかしているという。なかなか出ていけないお母さんもたくさんいるので、シニアの方は温かく見守ってほしいと語った。

「こねこクラブ&ひよこクラブ」

親子のための自主サークルである、こねこクラブ&ひよこクラブ代表の井上貴美枝さんから、デイリープログラムや年間スケジュールなどの活動報告がなされた。活動をしながら感じたことは、あやとり、竹とんぼ、わらべうたといった伝統的な遊びをシニアの方に教えて欲しいということである。先行世代からせつかく受け継いできて、自分たちの代で終わらせるのはもったいないので、シニアの方にぜひサークルに遊びに来てもらって、いろいろ教えてくださいと語った。



「子育て関連施策」

最後に、群馬県生涯学習センター指導主事の加藤仁子さんから、シニアが子育てに関わる際の情報や心構え等について報告がなされた。近年、群馬県内では自主サークルや子育てサロンが数多くできているので、それらに参加してみてもという提案や、身近で活動したい場合は、役場や近くの幼稚園、保育所に顔を出すとよいのではという提案がなされた。そして、子育て支援をするにあたって大事なことは、相手の立場に立って、相手の気持ちを理解することだと語った。

4. パネルディスカッションの主な内容

パネルディスカッションは、事例報告の補足説明をしたり、フロアやコーディネーターからの質問にパネラーが回答したりしながら進められた。議論が進むなかで、シニアとの関わりのエピソードが数多く出され、シニアが子育て支援するときのヒントとなるものが多かった。その一部を以下で紹介する。

荒川さんからは、育児サークル作りの課題について報告された。雑誌の取材を通じて多くの育児サークル関係者と交流するなかで、活動の場をなかなか確保できないという現実が浮かび上がってきたという。サークルの方には「子育てのお手伝いをしたい」、「地域の人とつながりたい」という思いがある。しかし、そうした趣旨は地域の人達になかなか理解されず、「サークルって一体何やってるの?」という目で見られ、公民館等のサークル活動する場所が借りられない。場所を確保できたサークルに聞いてみると、シニアの方や民生委員に相談したらサークル活動の話をもっと熱心に聞いてくれて、公民館を借りられるように手配してくれたという。なので、もしフロアにおられる方で、育児サークル活動のために公民館を貸して欲しいと言われる機会があったら、お知恵を拝借させていただき、ネットワークを利用してくださいますと訴えた。

井上さんからは、2つの提案がなされた。一つは、サークル活動にシニアを呼ぶ方法についてである。子育てサークルにシニアの方に遊びに来てもらって、いろいろなことを教えて欲しいと思っている。そのために、シニアの人がどんなことを教えてくれるのかをまとめて出前講座一覧みたいなもの作り、それを育児サークルに配ったり、公民館にチラシを貼ったりすると、すぐく利用しやすくなるという提案がなされた。もう一つは、日常場面での気遣いについてである。これは、井上さんが主催するサークル参加者に実施したアンケート調査の結果から出てきたもので、例えば子どもと一緒に銀行に行き振り込み用紙に記入しているとき、子どもがグズっていたら、少しの間だけでいいからシニアの方に面倒をみてほしいというものである。そこまでやってもらえなくても、「大丈夫!？」とひと声かけてくれるだ

けでも親にとっては精神的な負担がかなり軽くなるという。そんな日常の一コマのなかで、シニアの方からの気遣いをお願いしたいとの提案がなされた。

加藤さんからは、「防犯ボランティア」でのシニアの取り組みについて紹介された。2年ほど前から地域で子どもを守ろうという試みがなされていて、シニアの方々が防犯ボランティアとして小学校の通学路に毎朝立っているという。今では、先生方も一緒になって通学路の安全を見守っている。さらには、警察とも連携して不審車両もチェックするようになったという活動が報告された。



最後に森先生から「子育ては若い世代だけがする時代ではないという現状認識が示された。そして、フロアにいる皆さんの元気と笑顔と皺の中に入っている知恵を若い人達に伝えて欲しいという言葉で締められた。

笑いのこぼれる場面あり、真剣に聞き入る場面ありのメリハリのきいたパネルディスカッションであった。パネラーの興味深いお話しもさることながら、コーディネーターのまとめる力が光り、フロアの人に何かを得てもらおうという意欲がひしひしと伝わった。

5. シンポジウムの感想

シンポジウムが開催された3日前に、群馬県内で両親が3歳の息子を虐待したあげく死亡させるという事件が起こった。県民の子育てへの関心が異常に高まっているなかで、このシンポジウムは開催されることになった。

核家族化、少子化のなか、子育てに多様な人間が関わらなければならない状況にある。多様な人間の一人がシニアである。未熟な父親・母親が増えつつあるなか、シニアへの期待は高まるばかりである。しかし、その関わりには、シニア世代とヤング世代がどのように関係を取り結んでいくのかという問題も横たわっている。人と人がつながるにはどうしたらよいのか。子育ての大切さと人間関係の大切さを痛感させられたひとときであった。

なお、参加者から「私たちの子育て時代と子育てや環境の変化で変わってきているということが実感できた」、「若いお母さんが良く頑張っていることがわかり勉強になりました。一声かけることで役に立つことがわかりました」、「知識がないものが地域で支援できることはと考えた時、先生のいわれた『ザル』を捨て、お子様方に『にこにこ』ぐらいはできるように鏡を見ながら練習して支援活動を実践しようと思っています」等の感想が寄せられた。

シンポジウムのテーマは、生活学校の井口会長の「子育てサークルの現状を学び、自分たちがどのようなお手伝いができるかを探りたい」という思いから始まったと記憶している。前橋に足繁く通い、生活学校のメンバーや、荒川さんとお話するなかで、テーマが深まり、キャスティングが決まっていった。パネラーやコーディネーターのご尽力はもちろんのこと、様々な方のご協力によりシンポジウムは成功のもとに終わることができた。企画委員の一人として記して感謝申し上げます。

(石井久雄)